

阿蘇谷中心史観を越えて

【歴史編／第3章 古代、第4章 第1節 中世前半の阿蘇郡と高森町域】



熊本学園大学
経済学部経済学科 教授
小川 弘和

これまで阿蘇地域の歴史は、古墳時代から続くとされる阿蘇氏を軸とした「阿蘇谷中心史観」で描かれてきました。けれども中世の阿蘇大宮司家は宇治氏を氏としつつ、南郷谷を拠点としていました。これは古代阿蘇氏と中世大宮司家とを連続した氏族とみるうえで不都合な事実であるため、辻褃あわせの様々な説明が試みられて現在に至ります。

これに対して私は、実は宇治氏は衰退した阿蘇氏にかわって外部から南郷谷に入植して阿蘇谷にも進出した勢力なのではないかという疑問を抱いていました。これは高森町域が属する南郷地域の歴史を捉えるうえで、「阿蘇谷中心史観」を乗り越えられる魅力的な考え方でしょう。そこで私は『高森町史』の執筆にあたって、その検証から取り組むことにしたのです。その結果、中世には古代阿蘇氏を同族とはみていなかった大宮司家が、近世になると古代阿蘇氏と直系関係にあることを強調する由緒の創出に努めたことを、つきとめることができました。また宇治氏の入植と阿蘇社掌握のうえでは、高森町域の草部吉見神社が重要な役割を果たしたことも浮かびあがってきたのです。

それは古代から近世にわたる長い期間の膨大な史料を逐一検索・分析していくという、気の遠くなるような作業でした。けれどもそれによって高森町域にとどまらず、阿蘇地域全体の古代・中世史は根本から描き直されることになったのです。するとまずは阿蘇氏・宇治氏直系史観が歴史的事実とは異なることから、説き起こさなければなりません。そこで古代・中世史の叙述としては異例ですが、今回は中世から近世にかけての阿蘇大宮司家の系譜認識の変化から

筆を起すことになりました。また特定の家の系譜というデリケートな問題を扱うことから、とりわけ正確さ・厳密さに気を払ったため、その筆運びは難解であるかもしれません。

そのかわり、そこには誰もが信じ込んできた「常識」を学術的手続きによって塗りかえていく、歴史学のスリリングさを込めてみたつもりです。また近世の大宮司家がそのような「歴史修正」をせねばならなかった事情自体にも、転変する歴史の面白さがあるでしょう。

そのうえで、全く新たに描き直された高森町域・阿蘇地域の古代・中世史に触れて頂ければ、筆者として幸いです。



南阿蘇村祇園遺跡出土 国指定重要文化財
白地鉄絵鳥文壺(熊本県教育委員会提供)

「境目」地域の魅力 戦国時代、近世前期

【歴史編／第4章 第3節 戦国時代の高森地域、第5章 第1節 近世前期の高森地域】



熊本大学
永青文庫研究センター長
教授
稲葉 継陽

戦国時代から近世前期(16~17世紀)の高森地域の歴史を読み解くためのキーワードは「境目」です。肥後・豊後・日向三国境に位置する高森・野尻の地理的な重要性は、戦国動乱、わけでも薩摩の島津氏が肥後に侵攻し、阿蘇氏を服属させて日向の大友氏との対立を激化させた時点で一段とクローズアップされます。阿蘇氏の家臣でありながら、島津・大友という大名権力の狭間でたたかき行動する高森氏(「高森入道」)の姿を、島津家老の日記によって描いています。天正13年(1585)の末、大友方に寝返った高森氏は結果的に滅亡しましたが、同氏や村山氏、仁田水氏、野尻氏、さらに高知尾衆の甲斐氏や興呂木氏といった境目の中小領主たちが、連合と対立を繰り返し、島津氏や大友氏を翻弄するしたたかさや活力を示していた点が注目されます。

その頃、高知尾と境を接する草部地域には、「草部郷中三拾六輩」と自称する地侍集団が存在し、高知尾との国境紛争などを通じて、地域どうしの利害を調整するべく活動していました。こうした記録を含む草部吉見神社神主家の古文書によって、10ヵ村以上が協力して自治を行うような地域社会としての草部の歴史は、まさに戦国時代から始まったことを明らかにしています。

豊臣期から江戸時代初期まで加藤家の南郷支配のもとに位置づけられていた高森地域ですが、1632年に熊本藩主細川家の藩政下で高森手永と野尻手永に編成されます。これは戦国時代までに形成された現実の地域社会を制度化したものでした。高森手永の惣庄屋は武田氏、手永会所(役所)は南郷の中心地・高森町に置かれました。三国境目の野尻手永の惣庄屋は野尻氏、当初の会所は日向に抜ける街

道沿いの要所で戦国期の野尻城の麓にあたる川上村に置かれましたが、経済の発展とともに、後に都留新町に移転しました。

東側がすべて国境となっていた野尻手永には、それを管理する5つの番所が置かれ、合計223挺もの百姓鉄炮によって守られていました。意外なことに、熊本藩細川家は百姓＝地域住民の武力に依存することで、豊後・日向との国境の管理国境という大きな課題を実現しようとしていたことがわかります。

交通と経済が国境をこえて展開する高森・野尻では、惣庄屋たちも一般住民たちも、自由交易と規制との狭間で様々な問題に直面し、解決能力を高めていきます。見ず知らずの人々が行き交い、権力の拠点から遠く離れ、藩の直接支配が及び難かった野尻地域は、馬盗人をはじめとするアウトサイダーたちが国境をまたにかけて暗躍する世界でもありました。歴史資料の中の野尻や草部は鄙びた山村ではなく、むしろ外界にも大きく開かれ、境界の世界ならではの魅力と活力に溢れた個性ある姿を示しています。



野尻手永会所のあった川上の街道脇に惣庄屋野尻清右衛門が建てた見事な六地藏塔。正徳6年(1767)の銘がある。